

元禄享保期の経世思想

鄧 宜 欣*

一、はじめに

江戸時代は、本来、農業社会-自然経済を基本としつつ、一定の商業-貨幣経済を必要とする社会体制であった。平和な時代が続くなか、次第に都市中心の貨幣経済が活発になっていき、元禄期(1700年を前後する時期)には、両者の矛盾が表面化してくるようになった。「國財既につきはて、総て今より後の事共に、取用ふべきものなしといふ。」「今國財の足らざる所、凡百七八十萬兩餘れり」¹と第六代将軍家宣の幕臣・新井白石が当時政府の窮状を述べた。江戸中期以降、財政に悩むのは幕府だけではなく、それは大名領主層などの米経済を中心とする階級全体の問題であった。

以上の社会状況を背景に、為政者のみならず、当時の知識人も様々な解決策を考案した。現実の社会問題に正面から立ち向かって、問題の本質や改革政策について論ずる学問は経世学と呼ばれる。元禄・享保期に上述の社会問題の根本を把握し、それに対して優れた経世論を提出したのは儒学者・荻生徂徠とその弟子・太宰春台である。

両者の経世策は当時の知識人や為政者に広く読まれ、大きな反響を呼んだ。現在に至っても、江戸期の代表的な経世思想として、数多くの研究者に読み返され、その真価を何度も問われるほどの重要性を持っている。

二、先行研究と問題提起

二人の経世策の研究史を遡ると、戦前に滝本誠一・野村兼太郎・中村孝也・本庄栄治郎などの旧世代の経済史学者の著述がある。しかし、本庄の著作に太宰春台の米価論と藩専売論が一言言及された²以外に、殆どの研究は徂徠の経世策に重点をおいて、春台の思想が師の付属に過ぎないと論を繰り広げている。

戦後の徂徠に関する主な研究に、丸山真男と今中寛司の業績がよく知られている。丸山と今中の研究成果に加えて、近年の論説の一つとして、中村春作が「荻生徂徠『政談』の世界」一文で、徂徠の経世策を分析する際に、「制度」面にだけでなく、「風俗教化」面にも目を向けるべしと主張している³。

一方、春台の経世策について代表的な論説として尾藤正英の「太宰春台の人と思想」と武部善人の『太宰春台 転換期の経済思想』が挙げられる。

また、二人の経世策の比較研究として、野口武彦が「太宰春台の孤独」の一文で、徂徠の『政談』は危機の原因を正確に指摘し、且つ現実に即した解決策を提出したと評価したのに対して、春台の『経済録』は社会困窮の根本的な原因を把握していないため、「実用性」というより「文学性」が高いと酷評した⁴。

以上の先行研究に示した通り、徂徠と春台の経世策に関して数多くの研究がなされてきたが、殆どの論説は経世策の内容紹介や利点・欠点の分析に止まっている。徂徠と春台が師弟関係で共通の

*台湾大学修士2年

儒学を学問基盤とし、同時代の問題を目にしながら、異なった経世論を展開した理由についての説明はまだ十分に論じているとは思われない。

三百年後の今、両者の経世策に優劣をつけるのは意味がない。それよりも、両者の論の背後にある認識の相違を解明し、社会制度と人間との関係のあり方を考察したほうが我々に役立つのではないかと思われる。小論は先行研究を踏まえて、徂徠と春台の経世策の特徴をおさえて、両者の著作及び当時の史料を素材にし、それぞれの論の相違した原因を分析してみようと思う。

三、徂徠と春台との経世策の梗概

(一) 荻生徂徠：武士土着論

荻生徂徠は直接に国政に関与することはなかったが、八代将軍吉宗の知遇を得、将軍の諮問に応えて、『太平策』と『政談』との二書を執筆した。徂徠は『政談』で問題提起として「太平久敷続く時は、漸く上下困窮し、夫れよりして紀綱乱れて遂には乱を生ず。⁵⁾」と書いた。ここの困窮は、勿論当時社会一般の貧困を指しているが、特に当時の支配層の財政難を言っている。さらに「御城下は諸事に付自由成所なる上に、せはしなき風俗と制度なきとの二つを加ゆる故、武家の輩、(中略) 日々に困窮する事也。」と言って「旅宿の境界」、「せはしなき風俗」、「制度なし」を困窮の原因とし、支配者層を公儀・諸大名・旗本諸士の三つのグループに分けて、問題を解決しようとする。

徂徠の経世策の中心理念を、彼の言葉を借りて一言で言うと、「聖人の治めの大綱は、上下万民を土に有りつけて、其上に礼法制度を立る事、是治めの大綱也。」であり、つまり城下町に集まる人々を自らの知行地に帰させる体制を根本とするのである。具体的な実行法として、公儀(幕府)の部分で、まず「御買上げをやむる」、則ち貨幣で物を買うのをやめて、それに代わって諸大名の産物献上・所有土地の資源利用・私有職人団の利

用の三つの方法で、一切の需要を賄うと建言した。大名では、物を買わずに、自分の藩の領地から必要のものを直接調達する外に、城下町に集まる武士に担当の地域を配分して、すべての武士を自分の領地に住み着くのを命じるべきだと提案する。さらに、「武家知行所に居住する時は、家居は所の木を切て作る。米は年貢米を用ゆる。味噌豆も作る。衣服は織て着る。」と本来城下町に集まった武士達が地方に帰って、完全に自給自足の生活を送るので、米を換金する必要もなくなる。

要するに、徂徠が天下(特に政府と武士)の困窮を目の前にし、彼が考案したのは財政面の解決策のみならず、国家全体の制度を再建する理想図である。『政談』の「財の賑」の冒頭部で「惣て天下国家を治むる道は、古の聖人の道にしくはなし」、「此道を会得せば世界の困窮は直るべし」と書いてあるように、徂徠が自分の経世策に描いたのは、中国古代聖人(堯・舜・禹・湯・文・武・周公)の農業中心の封建治世である。

しかし、彼の打ち出した経世策には、当時の社会を根本から覆す要素が幾つか含まれている。一つは兵農分離政策の否定である。兵農分離は織豊時代から武士の反乱を防ぐ手段として長く行われてきた政策であり、武士を地方に帰らせ、農作業をさせるのは、武士即農民の身分再融合を意味する。もう一つは貨幣・商品経済の消滅である。彼の封建社会理想図には、人々は自給自足の生活を送り、貨幣経済や商人階級が介入する余地はまったく存在しない。以上の二点を合わせてみると、徂徠の経世策は農業中心の封建国家の再建を決意するのが分かった。

(二) 太宰春台：藩専売論

太宰春台は徂徠の経世学の後継者と呼ばれ、徂徠門下で経学を勉強しながら、社会現状に対する責任感と危機意識により、師とは別に自分なりの経世論を展開していた。彼はあくまでも在野の姿勢に徹していて、『経済録』、『経済録拾遺』、『産語』などの経世関連の著作を著した。

春台が以上の著作、特に『経済録』に自分の無類の博識を徹底的に発揮した結果、その内容は極めて雑駁なものとなった。しかし、その中で最も目立っているのは、いまでもよく経世策の代表として挙げられるのは言うまでもなく『経済録拾遺』で提出した「藩専売論」である。徂徠の弟子として、「國家に制度を立つるは本なり」⁶と彼自身がいったように、春台は制度を重視しないわけではないが、「然れ共天下の制度を改むることは、一國の力の及ぶ所にあらず」や「醫家に急なれば其の標を治すと云ふ如く、今の病の急なる處を見て、是を救ふべきなり」など、彼が社会再建の難しさを認識していて、そこから着手するというより、目前にある急務、則ち各藩の財政難を解決するほうがより現実的だと考えている。

その上、「如何にして金銀を手に入るの計を為す。是今の急務と見ゆるなり。金銀を手に入るの術は、賣買より近きことなし」と春台は江戸当時の貨幣経済と商品経済の不可避性を認識して、藩の経済を振興するためには、金銀を手に入る、つまりお金を儲ける方法を考えなければ成らないと考える。一番簡単な方法は、もちろん商売をすることである。

以上の背景で、春台は主要な経世策「藩専売論」を打ち出した。内容を簡単にまとめていうと、「國主より金を出して、其國の土産貨物を悉く買取る」、「國民の私に賣るよりも、其利多かるべし」という政策になる。藩主自らお金を出して、自分の藩の特産品を全部買い占めて、時価のいいときを狙って売り出す。こうして、商品売る利潤で藩の経済状況を改善する。前文でもいったように、春台の『経済録』の内容がとても雑駁なもので、彼の経世策はもちろん「藩専売論」だけに止まらない。しかし、この代表的な政策は彼と師・徂徠との経世策と決定的に異なる点である。よって小論は春台の部分では敢えて「藩専売論」を中心に論を展開する。

(三) 両者の経世策の比較

以上に示した徂徠と春台の経世策の違いは、二点にまとめることができよう。

一つは貨幣・商品経済の現状に対する見方の違いである。徂徠の『政談』を読めば、彼の商売嫌悪、商人を武士階層の敵とする姿勢が窺われる。例えば、「武家の輩、米を貴ぶ心なく金を太切の物と思ひ、是よりして身上を皆商人に吸取られて、日々に困窮する事也」のように、徂徠から見ると、貨幣・商品経済を代表する商人はまるで吸血鬼のように、武士階級の稼いだ米を全部吸い取ってしまう。なので、「唯武家と百姓との常住に安穩なる様子にするを治めの根本とす。商人の潰るといふは、曾て構まじき事也」という商人階級は潰れても構わない論点を持っている。他方、春台は「愚なる民は、米穀よりも優れる寶と思へるは、金銀あれば、米穀は求易しと思故也」と人々の米より貨幣を重視する現象を流石に度が過ぎると思うものの、彼の考えでは、『経済録』の「食貨」に書いてあるように、「古の聖人、農作の道を人に教玉ひて、其上に又交易して有無を通ず」、「有物を以て無物に易れば、此方も彼方も、融通して用足る也」と物の有無を交換する交易行為は古の聖人の教えの一部で、その行為自体は咎める必要はない。

もう一つは政策の規模の違いである。徂徠の武士土着論が狙ったのは国家制度の再建である。それは封建制の実行により、その上に礼法制度を再建する全体的な国家設計図である。徂徠の考えでは、彼の設計図にしたがって古代聖王の封建治世を再建した暁に、風俗も自らよくなり、経済問題も根本から解決できるという。一方、春台の藩専売論はその名で示した通り、国家全体ではなく、藩中心の解決策である。しかも、貨幣・商品経済浸透の実情に順応し、商売という一番手っ取り早く且つ即効性のある手段を利用して藩の財政難を解決するという方法である。

こうして、両者の経世策のそれぞれの特徴を述

べ、相違点を明らかにすることにより、当時の社会実態や経世論者の思考傾向明らかとなった。しかし、同時代の同学派の思想家が違う政策を打ち出したのは必ず何らかの原因や根拠がある。経世策の比較からもう一步進んで、両者の出身・著述からその理由を突き止めることにより、二人の思想の中身や、政策と人間との関係を解明するのが小論の続いで目標である。

四、差異の生じた理由試論：三つの観点から

徂徠と春台の経世策の違いを成した原因について、いくつかの仮説が考えられる。小論はここで一つの仮説を立てて検証したいと思う。それは「人間論」の違いである。以下筆者は徂徠の「弁道」、春台の「聖学問答」・「孟子論」（「斥非」の付録）の中から人間の本質を議論する章段を取り出し、人間論の違いが両者の政治論に如何なる影響を与えるかについて分析する。

（一）人間論：徂徠の人間信頼と春台の人間不信

徂徠の「気質不変化説」はかなり有名な論説であり、それは宋儒の「気質を変化す」に対する反発であると同時に、人間の本質の多様性を尊重し、それを自由に発揮させるのを為政者の責任としている。そして、人間の多様性を尊重する論説の背景に、徂徠の人間と人間性に向ける楽観的で暖かい目線が常に感じ取られる。例えば、

かつや相親しみ相愛し相生じ相成し相輔け相養ひ相匡し相救ふ者は、人の性然りとなす。故に孟子曰く、「仁なる者は人なり。合してこれを言へば道なり」と。荀子称すらく、「君子なり者は群するなり」と。故に人の道は、一人を以て言ふに非ざるなり。必ず億万人を合して言をなす者なり。（中略）能く億万人を合して、その親愛生養の性を遂げしむる者は、先王の道なり。（『弁道』より）⁷

といったように、徂徠はお互いに思いやりがあって、助け合うのを人間自然の本性としている。な

ので、為政者は天下の人々を一団にまとめて、彼らの本来有する親愛生養の本性に順応すればいいと説いている。そして、徂徠がまた言う。

孔子の「徳に拠り、仁に依る」と曰ふがごときは、人おのおのその性の徳に拠りてこれを失はず。性の徳は多端なりといへども、みな仁に害あらず。（『弁道』より）

人々の本質は多様であるが、それがすべて仁と衝突しない前提に存在しているという。以上の例を通して、徂徠がいかにも人間性を信頼しているのが窺われるだろう。

一方、春台の場合はどうだろうか。まず彼が『聖学問答』の中で、孟子の性善論について大いに批判した内容を見てみよう。

凡天下の人、争競の心なき者は有らず。人と争ては、人に勝んことを思ひ、人と競ては、人に後れじと思ふ。是人情なり。（中略）利に就くことは、青蠅の肉に集まるが如く、害を去くことは、毒蛇を畏るるが如く、都て何事も人にかまわず、一己の便利を求る心ある、是天下の人の実情なり。（『聖学問答』より、下線筆者）

『聖学問答』の中で、春台は徂徠とかなり異なった人間観を披露している。徂徠の個性尊重しながら、基本的に人間性を信頼する姿勢に対して、春台の考えは真逆といってもいいほどのものであろう。

「天地の中に生れ出たるままにては、禽獣と異なること無し」、「利に就くことは、青蠅の肉に集まるが如く」のように人間を禽獣や青蠅に例えるといい、「凡天下の人、争競の心なき者は有らず」、「都て何事も人にかまわず、一己の便利を求る心ある、是天下の人の実情なり」という競争心や自身の利益を求める傾向を人間性の一部に帰するといい、彼の人間不信の態度がありありと示されている。

(二) 道：徂徠の内外兼備の道と春台の表面のみの道

徂徠と春台は同じく道を個人の道徳だと考えず、中国古代の聖王が伝わってきた人民を治める方法だと主張している。しかし、人間性への認識という出発点の違いが次第に道について考え方の違いに導いていく。

徂徠の考える先王の道は、行為を規範する表面の制度であると同時に、人間の内心までに染み入る内面の教化方法でもある。同じく『弁道』に
仁なる者は、養ひの道なり。故に国家を治むるの道は、直きを挙げてこれを枉れるに錯けば、能く枉れる者をして直からしむ。身を脩むるの道も、またその善を養ひて悪おのづから消ゆ。先王の道の術なり。(『弁道』より)
という内容がある。則ち、道は正しいことを奨励し、間違ったことを訂正するように働きかける。善を養えば、悪は自然になくなるという。この「養い」の概念は「制度」と合わせて徂徠の政治観の核心要素といえよう。人間性を信頼するので、「養い」、つまり教化の力を信じ、その力を借りて風俗を端正し社会を良い方向に推進するという理想図を描き出すことができるだろう。

師と対照的に、春台は人間不信の傾向を示し、先王の道はあくまでも表面上の規範効果に止まり、人心を教化する効果がないと論を繰り広げる。

聖人の教えは、外より入る術なり。身を行ふに先王の礼を守り、事に処するに先王の義を用ひ、外面に君子の容儀を具たる者を、君子とす。其人の内心は如何にと問はず。

や

吾が聖人先王の道は、辱も天下を治むる道なり。至て大なる道なり。(中略)先王の天下を治たまふに、身を修むるを本とすといへども、礼義を以て外を治むるのみにて、心を治むること無し。内心は如何にもあれ、外面礼義を守て犯さぬ者を君子とす。(『聖学問答』より、下線筆者)

などと書いたように、先王の道が及ぶのは表面の行為のみで、内心はどうであろうかは知ることではないのである。

(三) 政策論：徂徠の根本性の強調と春台の即効性の重視

先王の道が「制度」と「教化」の二面性を兼ねて持つと思うので、それを実行さえできれば、色々な社会問題も自ら解決できると徂徠が考えている。道が如何にも万能なものなので、それを実現する困難さを知っていても、万難を排除し実行する価値はあると彼が思っている。

大氏、先王・孔子の道は、みな運用営為する所あり。しかうしてその要は養ひて以て成すに在り。然るに後人の切迫の見は、急に仁を以て一切を尽くさんと欲す。(『弁道』より)
そして、道を実現できるかどうかはまさにその「養い」、つまり教化の面にかかることと徂徠が言った。教化というのは時間を掛けて人々に影響を与えるものなので、即効性を追究するのは間違いだと指摘している。

しかし、春台の考える道は「制度」という表面的なもののみなので、「制度を変える」という時間も掛かってリスクも高い方法を選ぶというより、他の即効性のある方法を用いて目前の急を救うほうが現実的だと考えている。春台の『斥非』付録の「孟子論」に以下の言がある。

夫れ徳を以て人を服せしむる者は上なり。その次は功を立つるに若くは莫し。然れども徳の人を服せしむるは、一朝一夕の故に非ず。必ずや漸を以てす。孔子曰く、「如し王者あらば、必ず世にして後、仁ならん」と。此れの謂ひなり。先王の世すら尚ほ然り。況や乱世に於いてをや。(『斥非』付録「孟子論」より)

彼は孟子の三代の治を以て天下を治めようとするのを批判し、乱世には、そういった時間のかかる方法を実行する余裕がないので、まず目の前の急務の解決に専念し、制度や教化などのことは後で

考えようと主張した。

生徠』岩波書店に収録、以下同。

五、結論

経世策を含める政策というのは、人間性に基づいて設計し、社会をある方向へ推進しようとするものである。なので、政策制定者の人間観が彼ら自身の政策に如何に大きな影響を与えるかが想像しにくいことだろう。

徠は人間性への信頼から出発し、道を以て人を変えることができるの信じ、制度を立てることで人を変えることにより社会も変わるという理想図を描き出した。彼の考えでは、どんな問題でも、経済問題も、風俗問題も、武士土着という古代先王の道に符合する理想社会の再建により、解決できるものである。一方、人間不信の春台は、制度の存在の必要を認めるものの、それはあくまでも表面的な規範でしかないので、後で考えても問題にはならないという。むしろ目の前の急務、つまり藩の財政難の解決に専念するほうがより現実的なやり方だと考える。

前文でもいったように、両者の異なった経世策の背後には、人間論以外、他の要素もある。それを合わせて、新しい角度から分析することにより、両者の経世策を再発見・再評価するのを今後の課題としたいと思う。

注

- 1 徳富蘇峰 (1936) 『近世日本国民史 元禄享保中間時代』 明治書院、pp.21-22
- 2 本庄栄治郎 (1948) 『日本経済思想史』 龍吟社
- 3 中村春作 (2013) 「荻生徠『政談』の世界」『東洋古典学研究』 35, 53-67
- 4 野口武彦 (1970) 「太宰春台の孤独」『文学』 38(12), 30-45
- 5 平石直昭校注 (2011) 『政談：服部本』 平凡社、p.86
- 6 滝本誠一編 (1970) 『日本経済大典 第9巻』 明治書院。以下の『経済録』、『経済録拾遺』の引用はすべて同書より。
- 7 吉川幸次郎等校注 (1973) 『日本思想大系・36 荻

参考文献

- 今中寛司 (1976) 『徠学の基礎的研究』 吉川弘文館
今中寛司 (1992) 『徠学の史的研究』 思文閣
武部善人 (1991) 『太宰春台 転換期の経済思想』 御茶の水書房
徳富蘇峰 (1936) 『近世日本国民史 元禄享保中間時代』 明治書院
中村春作 (2013) 「荻生徠『政談』の世界」『東洋古典学研究』 35, 53-67
野口武彦 (1970) 「太宰春台の孤独」『文学』 38(12), 30-45
平石直昭校注 (2011) 『政談：服部本』 平凡社
本庄栄治郎 (1948) 『日本経済思想史』 龍吟社
丸山真男 (1952) 『日本政治思想史研究』 東京大学出版会
吉川幸次郎等校注 (1973) 『日本思想大系・36 荻生徠』 岩波書店
頼惟勤校注 (1972) 『日本思想大系・37 徠学派』 岩波書店